

CASA 連続市民講座

第XIV期 地球環境大学

くらしの中の公害

課外講座 百聞は一見にしかず～泉南アスベスト工場跡地見学

とき：2006年10月7日（土）

場所：泉南アスベスト工場跡地など

今期の地球環境大学では「くらしの中の公害」について考えてきました。最終回の課外講座では第一回講座で取りあげた「アスベスト問題」について、実態をもっと深く知るために大阪府の泉南地域を訪れました。地元の方からは、昔、日常生活の中で目の当たりになっていた工場周辺の光景や健康被害などについて伺い、被害者の方々の強い思いを感じることができました。

まとめ：江川真理子（CASA ボランティアスタッフ）

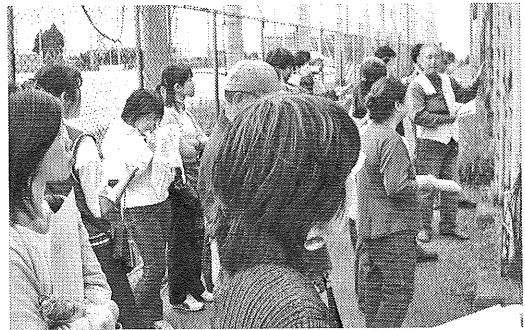
遺族原告の話

JR新家駅に集合した私たちは、まず、アスベスト工場のすぐ横の畑で被爆して肺ガンで亡くなった住民の遺族としてアスベスト国賠訴訟を起こしている原告の南さんにお話を伺いました。かつてアスベスト工場のあったという現在の駅周辺は、住宅やマンションが立ち並び、少し離れたところには畑も残る、一般的な郊外の住宅地です。

南さんのお話によると、昭和50年代初め頃には、工場の換気扇から粉塵（アスベスト）が飛んできて近くの木の葉が真っ白になるほどだったそうです。雨の日は木の葉に積もった粉塵が流されますが、次の日にはまた真っ白になるほど工場周辺に大量に飛散し、近くにあるキャベツ畑やタマネギ畑、幼稚園にある砂場にも積もっていました。粉塵が積もった作物が食べられ、幼稚園の子どもたちが粉塵の積もった砂場で遊んでいたそうです。南さんや周辺の人たちに健康被害が出て、工場からの粉塵が原因だと訴えても「工場内で勤務している人が大丈夫だから」という理由で当時は全く相手にしてもらえなかったということです。

石綿村の見学

次に私たちは車に分乗して、実際にアスベスト（石綿）工場があったところをいくつか見学しながら、泉南地域の石綿被害と市民の会の柚岡さんと林さんに案内していただきました。石綿産業が集中



工場近くに建てられた学校を見学する参加者

していたところを地元では石綿村と呼んでいます。大きな工場は10社くらいあり1999年頃まで稼働していましたが、現在はガラス繊維やセラミックなど石綿の代替品の工場に変わっています。ある工場のすぐ近くには公立の中学校と高校があって、それぞれ1981年、1984年に池を埋め立てて建てられたそうです。授業中や部活動の練習中に粉塵が飛んでくるかもしれないし、こんな工場の近くに学校をつくるなんて…と驚きました。当時はまだアスベストが危険なものだという認識がなかったから建てられたのだと思います。

医師の水嶋さんのお話

石綿村の見学が終わったあと、近くのCASA会員の三澤さん宅で、東大阪生協病院の内科医師の水嶋潔さんからアスベストについての講義を受けました。まず、泉南地域の石綿産業の特徴とし

て、一次加工品の製造が中心で下請けの中小零細(特に10人以下の家内産業)が多かったことや、工場の集中と住宅との混在があげられるそうです。次に写真を交えて石綿一次加工の作業光景の説明がなされ、同席した元石綿工場労働者の藪内さんからは、マスクなどもつけずに無防備な状態での作業がほとんどで、触れるとチクチク刺激があつて痛かった、などのお話がありました。

水嶋さんは、泉南地域でのアスベストの健康被害を明らかにするため、健診を行っています、元石綿工場労働者の約4割、付近住民(環境暴露)でも2割という高率で石綿肺(疑い含む)が認められたそうです。

医学的に見た泉南の石綿被害の特徴としては、白石綿を多く使用したため中皮腫(癌の一種)は少ないが、石綿肺(石綿が原因のじん肺)や胸膜プラーク(肺を覆う2層の胸膜が肥厚化する症状)などが多いことや、非労働者の環境暴露が多いことなどがあげられます。石綿肺は医療機関においてまだ十分に認識されておらず、診察を受けても見落とされている例が多いと思われ、治療も確立されていません。また胸膜プラークが多いということは、長い期間にわたって石綿暴露があったことを意味します。胸膜プラークのある人は、そうでない人よりも中皮腫や肺がんになるリスクが高いことがわかっています。しかし、2006年3月から施行された「石綿新法」では、その救済対象を「中皮腫と肺がん」に限っており、泉南の被害者は救済されにくい状況に置かれています。

今後は、環境省の調査内容の公開を求めたり、新法における環境暴露の被害者の救済や国賠訴訟の支援、明らかになっていない被害者の掘り起こしや大規模被害地域で連絡会を作るなどの活動をしていきたいということです。

その後、柚岡さんや林さん、そして藪内さんからは、石綿産業の歴史や、実際どんな作業をしていて、健康被害がどんなものなのか、などの具体的な話を聞きました。藪内さんが、「工場がなくなった今も深刻な健康被害に苦しむ人たちがたくさんいます。既に亡くなられた方も多いのでこれから対策をとるのでは遅いとは思っています。自分自身が病気になってしまったのは仕方がないけれど、



スライドを投影しながら解説する水嶋先生(右奥)

今後他の人たちを助けるためにできる限りの活動をしたい。」と話されたのを聞いて、地域住民や石綿産業の元従業員の方がどのような思いをもって訴訟を起こしているのかが伝わってきました。

印象的だったのは、アスベスト問題で泉南地域の石綿が注目されているが、被害のことだけでなく、明治時代からの産業としての石綿業の発展、地方からの集団就職や在日朝鮮人の方々が作業に従事していたこと、戦後の経済復興にも大きく貢献してきたことなど、歴史的なことも知ってもらいたいというお話でした。また、廃業した小さな工場にはまだ機械が放置されているけれど、これは処分せずに保存し、歴史的なことを含め、現在起きている問題を広く人々に知ってもらうための博物館をつくるなど、負の遺産ではあるけれど何か形として残していく必要があると思う、と最後に話されていたことが印象的でした。

講座に参加して

私は泉南の隣の泉州地域に住んでいますが、アスベストの問題が取り上げられるまで、泉南地域のことをあまりよく知りませんでした。今回訪れた、もと石綿工場の横にあった公立の中学校は、高校時代の友人の母校で、その隣の高校は別の友人が通っていたところでした。友人がその中学・高校に通っていた頃は、まだその石綿工場は稼働中だったと聞き、かなり驚きました。公害というと、昔ある地域で起こったこと、今では他の地域で起こっていることだと考え、自分たちの問題だとか、身近なことだと実感することは正直あまりありませんでした。今回の課外講座に参加して、公害が本当に自分の暮らしに近いところでも起きている問題だということを感じました。